

六玉川

へ鳥が啼く あづまからげの草枕 へ急がぬ旅も敷島のく
道をたどりて六玉川 筆に綴りて書き残す 景色は歌の徳ならん
へ足曳の山踏みわけて遙々と 霞たなびく遠近の 眺めもあかぬ
七重八重 花のしがらむ影添えて へ色には井出の山吹に 蛙も
歌の風情あり へかゝる名所に紀の国の 高野の奥の流れをば
汲みやしつらん旅人の アゝ忘れても

へ野路はゆかりの色深く 錦の萩の下葉まで もれてぞおける白
露の 月はやどりて夜もすがら 恋しき人は鈴虫の へふり棄て
られて機織の 夜寒をわびる閨の戸に つゞれさせちようきりぎ
りす たれを松虫焦れてすだく 我も思いに堪えかねて

へいとゞ心のやるせなや 迫る恪気に津の国の 濡るゝ袂の小夜
衣 更けて砧の憎らしや へどこの口舌の戻り足 言訳くらき爪
琴の 調子もほんに愚痴ながら いつか結びし中の緒に 通う千
鳥の睦言に 夢の最中は調布や

へ照る月の浪にたゞよう六玉川 干してさらく 晒らす細布

(晒し合の手)

へ晒らす細布手にくるくくと 晒らす細布手にくるくといと
しおらしき賤のわざ

へ実に玉川の流れより 澄める心の清元の すさみに残す筆の跡
栄え久しくめでたけれ。